

JAF AE Newsletter



No. 22 (July 2007)

第21回全国大会/京都光華女子大学にて開催

プログラム

日時：2007年6月30日（土）10:00 - 17:40
 場所：京都光華女子女子大学 徳風館 6階
 総合司会：田嶋ティナ宏子（白百合女子大学）
 10:00 開会の辞：河原俊昭
 （大会実行委員長・京都光華女子大学）
 会場校挨拶：岩田強
 （京都光華女子大学文学部長）
 会長挨拶：本名信行（青山学院大学）
 10:10—11:30
 特別講演：大谷泰照（名古屋外国語大学教授）
 「21世紀のアジアと英語をどう考えるか」
 11:30—11:50 会員総会
 13:20—14:50 研究発表
 司会：榎木薫鉄也（秋田県立大学）
 「World Englishes and the Well-Educated Person」
 James D'Angelo（中京大学）
 「題材と登場人物の発話から分析した
 韓国初等学校英語教科書の特徴」
 杉山明枝（荒川区教育委員会）
 「台湾の国民小学・国民中学・高級中学における
 英語教育の連続性に関する調査研究」
 相川真佐夫（京都外国語短期大学）
 15:10—16:00 ESSC 実行委員会
 「第1回 ESSC（Extremely Short Story
 Competition）の総括」
 16:00—17:40 シンポジウム
 「The Future of Asian Englishes」
 司会：James D'Angelo（中京大学）
 発題：日野信行（大阪大学）
 Ma. Lourdes S. Bautista
 （De La Salle University, Manila）
 Renu Gupta（会津大学）
 閉会の辞：末延岑夫（兵庫県立大学）

第21回全国大会参会記

末延岑夫（兵庫県立大学・名誉教授）

第21回全国大会は、その数字の通り、まさに21世紀の「世界の英語」の行方について考える大会だった。会長挨拶では、「二ホン英語」を見直そうというアピールから始まった。ロシアや中国ではすでに「ロシア英語」、「中国英語」の研究で Ph.D を取得する学生が現れているという。「二ホン英語」の提唱者の一人として、筆者はどれほど勇気付けられることか。

さて、特別講演では、世界各国の英語教育を紹介する人として知られる大谷泰照氏が、いきなり「日本の英語教師は犯罪者だといわれている」といったのには皆驚いたようだ。しかし、この驚きは、これは決して人事（ひとごと）ではない。私たち言語教育に関係する者たちにずしりとかぶさってくる人道上の問題だからだ。でも、あえて犯罪者と呼ばれるのであれば、その大元は、学会に鎮座しているといっても過言ではない。日本の大学の英語教師は約一万人おり、その数ある英語関係の学会のほとんどは内部自体が差別的で、後続に道を譲るところか、いまだに偏った英米崇拜思考を堅く守りながら、20年も30年も連続して役職を牛耳り、支配し続けている人たちがなんと多いことか。自分たちがアジアの人間であることを忘れ、後続教師や学習者たちには自らの「二ホン英語」「アジア英語」を「恥ずかしいもの」と思わせ、いまだに厳格に「英米英語」の発音と文法を強要し、同時に英米の言語学、英語教育に媚を振っている。それを支えているのが文部科学省で、学問が完全に淀んでいるのだ。その結果、3,000万人の日本の学生たちの英語力のみならず精神までも蝕んできた。日本の英語教育はこのように根本から腐っており、今回の「犯罪者」発言は、その

からくりを世間が暴露したからに他ならない。

ところが、このような学会の内情を 30 年以上も前から訴えてきた英語教師もいるのだ。そのために学会どころか学界までも追われたのだということをおぼろげに忘れないでほしい。例えるには異論もあろうが、最近の食品会社の雑肉混入事件も、外から批判される前に必ず内部のものが一番先に敏感に感じているものだ。農工省も早くからこのことを知っておりながら何の処置も講じてこなかった。その点、自画自賛めいて恐縮だが、本学会では設立当初から、こうした癒着や悪癖をなくすために、学会役員はすべての会員からの選挙によって公平に選出され、2 年ごとに再選挙されてきた。そして最近ではさらに同一役員が例え選挙で選出されても、5 期以上は連続して勤められないように規約をより厳しく改定した。そして私たちの学会は、社会言語学の立場から、言語学、言語教育において、当たり前のことながら欧米もアジアも公平に見るといふ哲学に基づいてやってきたことを誇りに思いたい。

さて、午後の研究発表では、D'Angelo 氏が World Englishes を教えながら、その意義とその信念を伝え、その結果 Well-Educated Persons を世に送り出すことの必要性を、自らの実践を元に心熱く述べた。そういえばどちらも頭文字が WE である。WE を通じて真の教養人につなげていくという一石二鳥のまじめな教育論であった。

次に学生時代から英語だけでなく、韓国語にも興味を持ち続けてきたという杉山明枝氏は、現在韓国の子供たちの間で使われている教科書の分析を行った。韓国の英語教育が理想に向けて進む中にも、現場の混乱の様子もじかに聞くことができた。

次いで相川真佐夫氏は、英語教育の連続性について、台湾の小・中・高校生の学習過程を調査した。学習の段階をひとつ上るごとに、興味の中身もそれ相応に違ってくるが、そこにずれが生じてくるというのである。また、評価の仕方が違うためにもずれが起こることをも突き止めた。ところが何と云っても、絶えず当局で小刻みに修正される指導要領の中身が学問的であり意欲的であることが、日本の官僚態勢と根本的に違う点である。

いずれの研究発表も、全国大会にふさわしい、書かれたものでは得られない実に生身の情報を与えてくれるものであった。それが証拠に、会場からの活発な質問にもうなすける点が多かった。

休憩をはさんで、約 1 時間にわたって ESSC (Extremely Short Story Competition) の総括が行われた。過去 1 年にわたって続けられたこのキャンペーンは、実施者側にとっても参加者側にとっても、大きな成果が認められた。中でも、参加者たちの膨大な量の「二ホン英語」の資料から、今後詳細な分析の結果が出ることを心待ちにしたい。ちなみに筆者の場合は、大学生たちにずっと Extremely "Long" Story Competition を実施しながら、「二ホン英語」を分析してきたものである。日本人学生たちの、エラー・フリーの、無制限の中で書く英語も、おほかたで楽しいものである。



本大会の最後を飾ったのはシンポジウム「The Future of Asian Englishes」であった。Bautista 氏、Gupta 氏がそれぞれフィリピン、インドの英語教育の歴史と現状を、そして日野信行氏が JEIL (Japanese English as an International Language) ということばを使って、日本における英語教育の将来について述べた。日野氏は「Jail」と混同しないためにジャイルと発音したが、筆者はこのことばが特別講演での「犯罪者」と二重写しになった。この「犯罪者」たちには、今こそ日野氏の提唱する JEIL の環境のもとで、いまだ日本の英語教育界で横行する英米崇拝の思想から一日も早く脱却して、本名会長がアピールした「二ホン英語」だけでなく、社会言語学の立場から「アジア英語」の原点を、一から謙虚に学んでほしいものである。

12 月の第 22 回全国大会は、昨年の宮崎に続いて再び九州、熊本大会である。当地の先生方は本学会設立当初から重要なメンバーとしてこつこつ

アジア英語を勉強してこられた。その花咲く成果を今から楽しみにわくわくしている。

特	別	講	演
レ	ビ	ュ	ー

21 世紀のアジアと英語をどう考えるか



大谷泰照氏 (名古屋外国語大学)

相川真佐夫 (京都外国語短期大学)

大谷泰照氏のご講演を拝聴する機会は幸いにも多い。博学な知識、鋭い洞察、蓄積・収集された豊富なデータを常に時間いっぱい披露していただき、毎回先見に満ちた新たな視点を与えてくださる。深い感銘を覚えずにはいられない。今回、日本「アジア英語」学会にて特別講演「21 世紀のアジアと英語をどう考えるか」を拝聴できたことは極めて嬉しいことである。しかしながら、第 21 回目にして初めて氏を迎えるということ。「遅すぎる」と考えるのは私だけであろうか。

大谷氏の異言語教育政策研究の基盤には常に 2 つの座標軸が置かれる。ひとつは縦軸の「歴史軸」、もうひとつは横軸の「国際軸」である。21 世紀のアジアにおける異言語教育はどうあるべきか考えるために、また、現在の日本の異言語教育の状況を客観的に診断するために、過去の歴史から学ぶことと、広く世界の動向を見据える視点をしっかりと持っておく必要があると氏は主張される。

歴史的視点から見える日本の異言語教育政策は今「危機的状況」と判断される。氏によれば日本

は明治時代以降 40 年の周期をもって「反英」と「親英」を 3 度繰り返し、その転換点とは常に戦争—薩英・馬関戦争、日清・日露、第 2 次世界大戦—であったという。自信を持つと英語に背を向け、窮地に陥ると英語に寄りかかる。現在は武器こそは持たなかったものの、1985 年の「プラザ合意」を起因とした「経済戦争」の敗北という 4 度目の周期にあるという。小淵内閣の「英語公用語論」、小泉内閣の「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」なども、その日米経済戦争の敗北という文脈から生まれ出たものであり、英語一辺倒への偏重傾向は、「危機的状況」の一端であると指摘する。第 2 外国語教育を削減する大学教育や英語以外の言語教育番組の縮小を計画する NHK などにもその流れを垣間見ることができるといふ。過去の失策の原因究明を行わず、英語だけに偏った改革を行い、異文化理解、異言語による文化的価値を学ぶことをしなければ不幸なサイクルをまた繰り返すとの警告を示唆されているようである。

国際的視点からは、日本をアジアと比較し、アジアをヨーロッパと比較することが診断方法となる。アジアにおける異言語教育を見れば、シンガポールに見られる実利的な英語一辺倒教育、韓国に見られるような自文化・自民族至上主義の発信型英語教育など、異文化を理解しようとする視点の欠落を氏は指摘する。このような異言語教育が行われているアジア諸国とわれわれ日本人は同じように流されてよいものであろうか。一方、欧州においては、実利的でも自民族礼賛型でもない。母語プラス 2 言語の教育によって「相手の国を理解し、相手の言葉を理解する」という複数言語主義の精神を教育政策に示している。この背景には、ドイツとフランスとの 4 度目の戦争を回避させるために、欧州諸国が不戦共同体を作り、戦争修復に必死に取り組んでいる姿がある。通貨統合、23 言語を公用語にすることにより発生する膨大な通訳者への人件費など、さまざまなものを犠牲にしてまでも、平和のための言語政策を目指している様子は戦後の教訓が最も顕著に現れている例として注目に値するという。

これらの氏の指摘をアジアのコンテクストに応

用するならば、21 世紀のアジアでは平和共存のため、互いの理解のための異言語教育政策に取り組みべきであると考えられる。また、英語はあくまでそのための一言語に過ぎず、文化や言語の多様性、その多様性が文化的価値と捉える異言語教育政策の必要性が示唆される。

「言語はかつて高いところから低いところへ流れた。しかし、今は水平に流れている。このことが、人類の歴史の中で初めて認められた」と大谷氏は強調される。この視点をアジア英語の研究においても持っておきたいものである。

Symposium Review

The Future of Asian Englishes

James D'Angelo (Chukyo University)

Held as the last event before the closing of JAF AE #21, the Symposium provided a valuable update on the latest directions of English in three important Asian contexts, and some insightful pointers into where things are going.

Professor Nobuyuki Hino of Osaka University led off the symposium, chaired by myself. Hino sensei dramatically unveiled an important new term to add to our sociolinguistic lexicon: JEIL, or Japanese English as an International Language. Pronounced 'Jile' rather than 'Jail' (a joke well-received by the attendees), this concept is liberating rather than confining, and helps free Japanese English from the stigma of what Kachru refers to as an expanding circle 'performance variety,' and its concomitant 'second class citizen' status.

Indeed, Braj Kachru and other scholars have questioned whether a country such as Japan can truly develop a legitimate, codifiable variety of English without the necessary pre-condition that the language be used in some semi-official capacity *within* Japan: giving local speakers a chance to use English frequently, and to develop endonormative standards which incorporate features of local culture, ways of thinking, and

various linguistic features of *nihon-go*.

In contrast, for Professor Hino, this local use is **not** paramount. Through the great amount of international interaction conducted by *nihon-jin*, JEIL can be refined and developed as a legitimate variety in the family of WEs. With a strong foundation in English, and then the opportunity to interact internationally on a regular basis, Japanese English may become one of the **most** intelligible varieties of English! Larry Smith's experiments have earlier confirmed that for NS and NNS listeners, Japanese English is highly intelligible! And it is inevitable that the flavor of Japanese culture and language will still be an integral part of every Japanese English speaker's language.



Professor Hino's final point is that while local textbooks have adopted Japanese rather than NS characters and local Asian contexts within dialogues, the actual language is still basically American English. The final step is for the language itself to mirror JEIL as a model.

Professor Ma. Lourdes Bautista of De La Salle University, Manila, was the next speaker. She provided a fascinating look into the world of Business Process Outsourcing (BPO), as part of her work with a research group headed by Kinglsey Bolton.

Originally starting with 'Call Centers' in India, the field has greatly expanded as a low-cost alternative for multinational companies: thanks to the English proficiency of Outer Circle workforces. Ironically, Professor Bautista's data indicates that only 3 to 5 percent of those applying for BPO jobs

in the Philippines have adequate English proficiency to be considered 'immediate hires.' A further 10-15 percent can work at a BPO after receiving intensive one-month training, in such unfortunately named classes as 'America 101' and 'Accent Reduction'.

While at first it may seem that BPOs force Indians and Filipinos to falsely modify their English towards an American model, when looking at the situation more closely, the increase in BPOs gives the Philippines a chance to really see how intelligible its English is, and to have a stimulus towards meeting 'high international standards.' With a current shortfall of up to 250,000 workers, demand far exceeds the supply. This gives a real stimulus to young Filipinos, making it quite palpable that English can be the 'language of opportunity and aspiration' as Bautista mentions. Rather than pushing Filipinos to speak American English, it motivates them to speak a more intelligible, acrolectal form of Philippine English, while still maintaining the ability to—as Anne Pakir has shown—slide down the 'lectal kline' to speak a more code-mixed local variety, after work and at home.



According to Bautista, there is a double benefit of real economic gain for those who can get such jobs (although the burnout rate is high: average tenure is only 8 months), and the future possibility of better and better pay, as the type of BPO work moves up the 'value chain' from simple back office functions to more skilled jobs in

software development and writing of technical manuals. This may be the ultimate satisfaction, as 'the Empire speaks back.'

The final speaker of the symposium was Professor Renu Gupta of Aizu University. Speaking on the Indian context, she made the interesting comment that the country had a '**supposedly** English-speaking population.' While statistics from Crystal indicate that in the 1980s India could claim only 5 percent of its population spoke English as a true second language, Kachru has recently claimed that it may now be as high as 33 percent! Yet Gupta brings us back down to earth, pointing out that in a country where the overall literacy rate may be only 60 percent, it is hard to imagine that one-third of all Indians have high English proficiency. She mentioned that according to the novelist Arundhati Roy (*The God of Small Things*), 'it is easier to make a nuclear bomb than to give elementary education to 400 million people!'

These statistics make one realize that while India does have its own variety of English, it still has a long way to go, and the English speakers are mainly concentrated in affluent urban areas. Nevertheless, she points out that the growth of a significant middle class does bring an increase in those who can speak English well.

Professor Gupta saw no native speakers of English when she was growing up, and this corroborates Yamuna Kachru's comment that she had never seen a native speaker until she went to University. She said that in India, English was sometimes referred to as a 'library language.' So ironically, the fact that Indians mainly spoke English with other Indians, and were taught by Indians, helped to develop a unique variety of English, but also made such a variety less intelligible to outsiders. There was little reason to adapt to outsiders. Professor Gupta also reminds us that we cannot look at English in a country such as India in a singular way. There are a wide

variety of Englishes in use in India, from 'butler' English to local educated English.

In conclusion, it seems that Professor Hino may be correct, and supported by Professors Bautista and Gupta, that while the theory of world Englishes stresses the uniqueness of local varieties of English, the reality of our global economy does seem to be pushing us towards more use of varieties which have a high degree of international intelligibility. But again, world Englishes has at least provided us with a framework to be proud of the creative features seen in local varieties, and to know that this is *atarimae*. I would much rather listen to a speaker of any Educated variety of Asian English, that to a basilectal speaker of a Native Speaker variety. Also, Japan may not be as far behind the Outer Circle countries as some might fear. The future looks bright for AEs! As Mathew Varghese mentioned, 'let's **lay claim** to English.'

Some thoughts on Japanese English

Setsuko Oda (International Christian University)

Reflecting on the 21st JAF AE national conference, the symposium on the future of Asian Englishes was great inspiration for me among other insightful talks and presentations. Ma. Lourdes S. Bautista and Renu Gupta both provided very concrete ideas how their Englishes, one from India and the other from the Philippines, are going through changes influenced by the waves of Business Process Outsourcing (BPO). In contrast, Nobuyuki Hino, who James D'Angelo referred to as a "national treasure" in the field of EIL, tried to conceptualize Japanese English, which he defined as the concept of English used by Japanese for international communication.

It is worth noting that he tried to substantiate an expanding-circle English variety by providing a definition. Yet, there are other issues I wish he could elaborate more on. For example, the issue of whether "Japanese" meant the ethnical

background or the nationality status was not mentioned. Would American-born children of Japanese parents qualify as speakers of Japanese English?

Also, I was not very clear why the purpose needs to be limited for international communication. When I communicate in English with my own children, who have mainly been educated in English, would it not count as a use of Japanese English?

Of course a short talk like that cannot include everything, but I think it provided a good start. We can now start on a long journey of exploring the topic with a guidebook Professor Hino has provided.

I know I should stop here, but being a Japanese, I guess I would take a little turn "TEN" as in KI-SHO-TEN-KETSU before I conclude. This is a case I think I might have used a kind of Japanese English, according to Professor Hino's definition. I was talking with an American friend of mine at her Manhattan apartment. She holds a Ph.D. in the field of modern art and has no particular interest in Japan. I was doing my little gossip about someone when I said to her, "he is so crooked!" Of course it does not make sense in the "standard" use of English, but I had to say that because no other expression can say what I really want to say about this man than "Kare-ha-nejireteru". My friend immediately understood me, saying that the expression sounds somewhat foreign to her but that she can vividly picture how I am feeling about him. Can this be counted as a use of Japanese English?

I thoroughly enjoyed the symposium and the conference and I cannot wait until I see everybody again in Kumamoto, home of Judy Yoneoka, who I always enjoy talking with, whether it be using American English (Judy) and Japanese English (me) or Japanese Japanese (me) and American Japanese (Judy).

パプアニューギニア人の英語について

岡村 徹 (帝塚山学院大学)

この春、東京のひつじ書房から *Language in Papua New Guinea* (岡村徹編著) が出版された。D. Leke 氏の論文 'The Role of Lingua Francas in Papua New Guinea' を取り上げ、パプアニューギニア人の英語について紹介したい。本書には、ニューギニアのパプア諸語、オーストロネシア諸語、ピジン・クレオール諸語、その他 (英語、独語、日本語) についての研究論文が収められている。

レケ氏の論文にはパプアニューギニア大学 (UPNG) の学生の使う英語についての記述がある。レケ氏は UPNG で 10 年以上英語を教えているので、大学生の用いる英語に詳しい。私は UPNG の学生の英語能力はきわめて高いと思っていたので、氏の報告は意外であった。それは次のようなことからである。

- ・首尾一貫性、論理性に欠けることがある。
- ・話題によっては英語で自己表現できないことがある。
- ・場面を考慮した英語の使用ができないことがある。
- ・ accept/except, can/may, who/whom, about/approximately, advise/inform, affect/effect, because of/due to, convince/persuade の区別がうまくできないことがある。
- ・英作文において、主述の一致が見られないことがある。
- ・英語とトクピシンを混同して使うことがある (tank も thank も [tenk] となる)。
- ・冗漫で無駄が多い。

私自身の分析でも、類いの傾向を見つけることができるが、その他にも次のような誤用が認められる。これはニューギニア人言語学者の、校正前の英語論文を英語母語話者に点検してもらった言語資料に基づく。

1. 綴り字

althought (=although)

2. 現在形と過去形の誤用

From this point on, contact with outsiders is (=was) relatively short, about 123 years~

3. 動詞の不規則変化

The provincial education- VTPS section begun (=began) work on~

4. イギリス英語とアメリカ英語綴りの同一文書中における混同

program/programme

5. 単数と複数の混同

~in South African and other West African case (=cases) are also prevalent in Papua New Guinea.

6. 過去分詞形

The arm (=armed) conflict escalated in early 1989~

7. 動詞形における-s 標識の不在

The language use in these electronic and print media forms tend (=tends) to be selected very carefully~

その他、コンマ、所有のアポストロフィー、前置詞、冠詞などの使い方での誤用が目立つ。大文字と小文字の混同も観察できる。これらはニューギニア人固有の誤用ではない。ただ、英語の中にトクピシン (=ピジン英語) を混ぜて使う点が他地域で使用されている英語と異なる。エリートが集まる UPNG の学生ですら、このような状況だから、教員養成の大学として有名なゴロカ大学や鉱山学部があることで知られている、パプアニューギニア工科大学、ビジネスに特化したディバイン・ワード大学など他の大学生も類似の状況が認められるであろう。



パプア・ニューギニアの卒業式

さて、レケ氏の主張を私見を交えながら述べてみたい。ニューギニア国内における共通語は、英語とトクピシンとヒリ・モツ語の三つがある。このうち、レケ氏は英語とトクピシンの関係を取り上げた。特に教育における共通語の役割を議論し

ている。

共通語の歴史や使用状況を十分に説明したうえで、共通語教育の在り方を論じている。英語は、政府、教育、科学、技術、商業、メディアの言語として定着しているが、都会に住む人びとの二十パーセントが英語の情報を共有できるに留まっただけで、地方に住む残りの八十パーセントは英語を知らない。現状では、不平等な社会を作っていて、一部のエリートだけが得をする構造になっていると指摘している。もっと在来語や共通語の価値を見出すべきであると主張する。

その理由として、まず、部族間もしくは部族内のコミュニケーションが欠落すると、社会の調和や集団の結束が図れないとする。したがって部族間の闘争へと発展していくと述べる。二つ目に、在来言語の危機を訴えている。英語の優位性が高まると、少数言語が脅威にさらされ、在来語を使って知識を得る権利や在来語を維持する権利が剥奪されると考える。英語学習者が増大することにより、在来語が二次的・周辺の存在となり、結果として消滅の道を辿ると言う。レケ氏は、英語が国内で中立的な言語になりうるか、英語だけがその候補としてふさわしいのか、英語で自国の文化を正しく表現できるのか疑問を呈している。

ニューギニアの教育制度は、社会化・参加・自由・平等の四つを目標とし、人間形成を育む。英語は所詮、外国語であり、外国語では人間形成は達成できないとする。さらにニューギニアは1975年に独立を果たしたが、言語的・経済的・政治的に旧宗主国から解放されているとは言えないとする。

ところでレケ氏の論文には「平等」という概念がたびたび登場する。ニューギニアのイワム族社会を調査した、吉田（1992）によると、「イワム族社会は単層社会である。身分や階級がない。すべての人々は平等である。各人が自分の食べ物を自分で入手し、カヌーを作り、家を建てて生活している。権利も義務も平等である。」(p. 104)とある。さらに、「イワム族にとって、物には二種類ある。贈与の対象になるものと、ならないものである。料理された食物（ただしプタ肉とヒクイドリの肉は別）や塩、砂糖、紐、針、糸、タバ

コなどが後者にあたる。それらについては、個人専有量を侵さない範囲内ならばいくらかでも要求できる。つまり、多く持つ者が持たない者に分けて当然という原理である。平等社会は、最低のレベルで平等になる社会だ。」(p. 108)と報告している。

レケ氏は、英語を使って利益を得るのは、少数の権力者や外国人のみであると指摘しているが、それよりもニューギニアの伝統的世界で大事な平等性に反すると捉えているのではないだろうか。レケ氏は、先ほど挙げた四つの目標は、トクピシンもしくは英語とトクピシンの併用によって実現できると考えている。長年、パプアニューギニア大学で教鞭をとった、J. リンチ氏（1982）の考えも引用し、わかりやすい英語を学校教育の現場に定着させ、さらにトクピシンやヒリ・モツ語との併用を目指すべきであるとした。

レケ氏の考えに異論はない。ニューギニアには700を超える言語がある。ニューギニア人同士ですら、「個」を語るには在来語では達成できない。つまり共通語であるトクピシンを使わないと「この私」を表現できないのである。音楽も在来語やトクピシンの歌がニューギニア人の心をとらえる傾向がある。したがって、教育の現場でトクピシンを有効に活用すべきであろう。英語かトクピシンのどちらを使うかという議論ではなく、両言語のバランスのとれた使用を目指すべきであろう。

[参考文献]

- Leke, Daniel (2007) The Role of Lingua Francas in Papua New Guinea. In Okamura (ed.).
- Lynch, J. (1982) English and effective communication in the public service, In Turner, M. M. (ed.). *Administration for development*, Waigani, Administrative College of Papua New Guinea.
- Okamura, Toru (ed.) (2007) *Language in Papua New Guinea*. Tokyo: Hituzi Syobo Publishing. (forthcoming).
- 吉田集而（1992）『性と呪術の民族誌—ニューギニア・イワム族の「男と女」』東京：平凡社

フィジーで Uko さんと

大原始子 (桃山学院大学)

冬の成田から8時間あまり、古い飛行機に揺られて、フィジー最大の島ビチレブ島のナンディ(Nadi)空港に着いた。飛行機が高度を下げても見えるのは海ばかり、まさに南太平洋の小島である。ゲートへと向かうとき、「夏休みの海水浴のにおいがする」という声が聞こえたが、むっとする熱い空気と強い潮のにおいがなつかしい気分させてくれる。

昨年の2月下旬、後藤田遊子氏との共同研究の一環でフィジーを訪れる機会を持った。フィジーの言語使用についての情報はあまり多くなく、英語・母語使用に関する試験的な調査をするためであった。

フィジー人はポリネシア系なので、飛行機のCAの女性も、ハワイの女性のようにがちりとして、髪はカールしている。街では皆カジュアルな服装だが、“スル(Sulu)”という布を腰に巻いている人を見かける。私達外国人もフォーマルには“スル”を身に着けることになる。ハワイでは“パレオ(Pareo/Paleo)”，グアムでは“パラウ(Palau)”といて、少し短く腰に巻くが、フィジーでは足首まで隠れるくらいに身に着ける。

人の移動が言語や文化を伝えるという。“スル”、“パレオ”、“パラウ”・・・南太平洋からグアムとハワイの2方向に分かれて人が移動したか、いやグアム経由でハワイに移動したのか。海を見ていると想像の世界も時を超えて広がっていく。

ある日、ホテルのフロントの女性がダウンタウンに行こうと誘ってくれた。英語が堪能だという妹と一緒に。フィジーの人はとても人なつこく、会ったばかりなのに、スイカのカットを買ってきて、私に歩きながら食べるという。ちょっと不衛生かと思ったが、ここは付き合い。

市場は賑やかで楽しい。野菜、果物はクレパスのように色が鮮やかである。サトウキビで作った薯も売っている。パイアを買った。350円!それも7つで。このパイアは、ハワイやフィリピンのものに比べると、やや小ぶりでも丸いからろけるように甘い。

一日がゆったり流れるフィジーから、日本に帰ったある日、彼女からメールをもらった。

Hope u will keep in touch, Take care
till we meet again

Inform me if u ever come back to Fiji

お気づきのように、you を u と表記する。ピジン的な要素でもある。“ゆうこ”ならば、その音から Youko と認識され、Uko と表記される。



北陸学院短期大学の2005年度研究助成を得て始まった、Ukoさんとの共同研究は無事終わり、今年3月論文となりました。抜き刷りをご希望の場合は、Ukoさんか私にご連絡いただければ幸いです。

Book Review



『世界の言語政策 第2集—
多言語社会に備えて』
山本忠行・河原俊昭編
くろしお出版 2007年
ISBN:978-4-87424-380-0
価格 2,800円(税込)

紹介者：高垣俊之 (尾道大学)

このたび、『世界の言語政策 第2集—多言語社会に備えて』が上梓された。本書の刊行は、「第1集」として位置づけられる前作『世界の言語政策—多言語社会と日本』(河原俊昭・編、くろしお出版、2002)が多くの読者から高い評価を得、支持された結果であろう。偶然であるが、私も「第1集」を学生に読んでもらいたい一冊として勤務校の推薦図書に指定した矢先だったので、今回の発刊の知らせに嬉しい驚きを覚えたも

のである。

本書は全 10 章からなり、日本はもとより、アジア（韓国、中国、マレーシア、シンガポール、インド）、ヨーロッパ（ドイツ、スペイン）、アフリカ（モロッコ、ケニア、タンザニア）の計 11 カ国の言語政策が網羅されている。各章において、これらの国の言語事情に明るい研究者が執筆しており、その中には編者を含め本学会メンバーによるすぐれた論考も収められている。

さて、最近読んだ英字新聞に「日本には正式な外国人の受入政策はなく、できるだけ彼らを排除するというのが唯一のポリシーである」という元法務官僚のコメントが紹介されていた。外国人の受入政策もままならないのであるから、わが国の言語政策の危うさは察して余りあるものである。しかし、国内の外国人居住者が 200 万人を超え、着実に日本社会が多言語化している状況を鑑みれば、言語政策にかかわる諸問題について真剣に考え、取り組んでいくことはもはや避けて通れないであろう。

副題に「多言語社会に備えて」とあるように、日本の言語政策を検討する上で、本書はいわば「宝の山」である。多くの意味で出遅れている日本であるが、「後発性の利益」という概念があるように、他国の様々な試みをヒントにすれば有効な言語政策を打ち出すことが可能であるかもしれない。と同時に、本書を通読すれば、それぞれの国が、固有の課題を抱えつつ、汗を流し、知恵を絞りながら試行錯誤を続けていることをあらためて知ることができ、当然ながら私たちも相應の努力を払う覚悟が必要であることを読み取ることができる。

最後に、多少気が早いかもしれないが、ここに「第 2 集」が世に出されたということは、「第 3 集」も今後編まれることになるであろうと期待するのは私だけではあるまい。そしてまた、「第 1 集」、「第 2 集」についても、内容をアップデートした改訂版が将来にわたって出版し続けられることを希望している。なぜなら、『世界の言語政策』は学問的にも社会的にもニーズが高く、大いに意義ある書物であると確信するからである。

連載シリーズ

日本「アジア英語」学会の歴史②

河原俊昭（京都光華女子大学）

日本「アジア英語」学会の歴史において、1998 年と 1999 年は、大きな飛躍の年であった。第 3 回全国大会は、1998 年 6 月 27 日に白百合女子大学で行われた。基調講演として藤田剛正氏による「マレーシア・シンガポール・ミャンマーの民族政策・言語政策・英語教育」があった。シンポジウム「アジア英語研究の最前線」では、本名信行・田嶋ティナ宏子・竹下裕子・エリックベレントの 4 氏による、まさしく最前線の報告があり、この分野での研究の広がりや深まりを聴衆に実感させることとなった。第 4 回大会は、1998 年 12 月 19 日に豊橋技術科学大学で開催された。基調講演は小野原信善氏による「ことばと言語政策」あり、シンポジウムは引き続き「アジア英語研究の最前線」(2)が行われた。

この年に、学会の紀要『アジア英語研究』（英名称 *Asian English Studies*）の準備が始まり、翌年創刊号が発行となった。創刊号には、4 件の学術論文と 2 件の書評が掲載された。紀要の発行によって、日本「アジア英語」学会の活動を支える四本柱（全国大会、研究紀要、ニュースレター、ホームページ）がすべて出そろったこととなり、これらは互いに有機的なつながりを見せて、会員同士の交流、研究に関する情報交換に貢献するようになった。

ここで、本学会から発行されているのではないが、『アジア英語研究』と姉妹的な関係にある学術誌に触れておきたい。1998 年の春に、学術誌 *Asian Englishes* がアルクから発行され、以来、年 2 回のペースで刊行されている。本学会の会員の多くも購読しており、たちまちにして、アジアの各地域で学術誌として高い評価を得るようになった。本学会の紀要の英語名 *Asian English Studies* と似ているがゆえに、時々読者から勘違いされることがあるのだが、この両学術誌とも、創刊号から内外の学者の関心を呼び、様々なところで引用、言及されてきている。

さて、1999年になると、第5回全国大会が、6月26日に清泉女子大学で開かれた。ジョージ・ラング博士による基調講演 "Hardly More Intelligible than Chinese Itself: A Short History of Chinese Pidgin English"があった。第6回全国大会は、12月11日に桃山学院大学で行われ、パローニハラニ博士による基調講演 "A Multi-perspective Approach to the Dynamic of Global Communication"があった。20世紀を閉じようとする1999年であったが、学会の歴史にとっては、実り多い年であったことは言うまでもない。21世紀以降の発展については次号で述べていこう。
(続く)

事務局からのお知らせ

1) 次大会について

次大会は12月1日(土)に熊本学園大学(熊本市大江)で開催します。大会実行委員長は同大学の米岡ジュリ会員です。

第22回全国大会研究発表者募集

第22回全国大会(2007年12月1日(土)、熊本学園大学)で研究発表を希望される方は、要旨(日英どちらか)をWORDで1枚にまとめ、9月28日(金)までに、大会担当理事の榎木蘭へ電子メールにてお送りください。

htenokizono@yahoo.co.jp

CALL FOR PAPERS

for the 22nd National Conference on December 1st, 2007 at Kumamoto Gakuen University. The Conference Committee invites submission of abstracts for papers. Submission is accepted only by e-mail. Please write a 1-page abstract with MS WORD and e-mail it to Professor Enokizono at [htenokizono@yahoo.co.jp]. The deadline is Friday, September 28th, 2007

2) 会則の変更

学会の会則が変更になりました。詳細はHPでご覧ください。

3) 2007年度研究助成プログラム

2007年度研究助成プログラムには1件の申請があり、5名の審査委員による匿名審査の結果、岡部大祐会員(青山学院大学大学院)への給付が決定いたしました。研究題目は「日本の医療機関

の情報ソースにおける英語使用の現状分析：東京都内病院のウェブサイト、配布パンフレット、院内表示の分析から」です。

会 計 報 告

日本アジア英語学会 2006年度決算

収 入 (円)			
費目	2006年度 決算額(A)	2006年度 予算額(B)	増減(A-B)
年会費	838,000	1,180,000	△342,000
全国大会	159,500	300,000	△140,500
(第19回青山学院短大)	(100,500)	-	
(第20回清泉女子大)	(59,000)	-	
モノグラフ紀要売上	36,200	100,000	63,800
大会補助金(大学より)	172,090	100,000	72,090
その他(貯金利息など)	188	0	188
10周年記念事業積立金	500,000	500,000	0
前年度繰越金	237,311	237,311	0
合計	1,943,289	2,417,311	△474,022

支 出 (円)			
費目	2006年度 決算額(A)	2006年度 予算額(B)	増減(A-B)
通信費	147,830	250,000	△102,170
ニュースレター印刷費	206,850	180,000	26,850
紀要制作費	251,685	200,000	51,685
文房具	5,940	10,000	4,060
全国大会	290,396	300,000	△9,604
人件費	48,800	40,000	8,800
インターネット保守・管理費	25,200	24,000	1,200
印刷代	21,500	40,000	△18,500
事務局運営費	116,240	100,000	16,240
モノグラフ補助費	96,000	100,000	△4,000
研究助成金	200,000	200,000	0
10周年記念事業積立金	343,695	703,854	△360,159
次年度繰越金	189,153	269,457	△80,304
合計	1,943,289	2,417,311	△474,022

上記の通り、ご報告いたします。

2007年6月30日

会計 加藤三保子

2006年度決算報告の監査を行った結果、適正であると認めます。

2007年6月30日

会計監査 矢野安剛

会計監査 森住 衛

日本「アジア英語」学会 2007 年度予算

収 入 (円)			
費目	2007 年度 予算額(A)	2006 年度 予算額(B)	増減(A-B)
年会費	1,075,000	1,180,000	△105,000
(正会員 200 名)	(1,000,000)	(1,000,000)	(0)
(学生会員 15 名)	(45,000)	(90,000)	(△45,000)
(法人会員 1 名)	(30,000)	(90,000)	(△60,000)
全国大会参加費	200,000	300,000	△100,000
モノグラフ・紀要 売上	40,000	100,000	△60,000
大会補助金	100,000	100,000	0
10 周年記念事業積 立金	0	500,000	△500,000
15 周年記念事業積 立金	150,000	0	150,000
ESSC ガイドブック 売上	20,000	0	20,000
前年度繰越金	189,153	237,311	△48,158
合計	1,774,153	2,417,311	△643,158

支 出 (円)			
費目	2007 年度 予算額(A)	2006 年度 予算額(B)	増減(A-B)
通信費	200,000	250,000	△50,000
ニュースレター印刷 費	190,000	180,000	10,000
紀要制作費	200,000	200,000	0
文房具	10,000	10,000	0
全国大会	300,000	300,000	0
人件費	50,000	40,000	10,000
インターネット利用料	25,000	24,000	1,000
ウェブサイト保守・ 管理	60,000	0	60,000
印刷代	30,000	40,000	△10,000
事務局運営費	100,000	100,000	0
モノグラフ補助費	100,000	100,000	0
研究助成金	100,000	200,000	△100,000
10 周年記念事業積 立金	0	703,854	△703,854
15 周年記念事業積 立金	150,000	0	150,000
ESSC 事業費	200,000	0	200,000
次年度繰越金	59,153	269,457	△210,304
合計	1,774,153	2,417,311	△643,158

今年度の会費を納めていない方は納入方お願い致します。

会費は、 一般会 5,000 円
学生会 3,000 円

郵便振込先は、

加入者名：日本「アジア英語」学会
口座番号：00280-8-3239 です。

お問い合わせは、会計担当の加藤三保子理事
(mihoko@hse.tut.ac.jp) までお願いします。

ニュースレター編集担当より

今回の JAF AE ニュースレター 23 号は、10 月中旬発行予定です。会員の皆様から記事を募集致します。国内外の紀行文、書籍紹介、海外おもしろ情報・画像、海外の新聞記事紹介など「アジア」「英語」「言語」周辺をキーワードに、800～1,200 字程度で奮って投稿下さい。画像なども是非ご投稿ください。

書いてみようというご意志がありましたら、8 月下旬までに編集担当(相川)までお知らせください。アドレスは aikawa@nnc.or.jp

【編集後記】

今回も非常にたくさんの方々にご執筆いただき、感謝いたしております。第 21 回全国大会では第 1 回 ESSC の総括報告が実行委員会より行われました。その概要は次号で特集したいと思っています。お楽しみに。

2007 年 7 月 20 日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 相川真佐夫

印刷 (有)すずぎ印刷

事務局

〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘 1-25

白百合女子大学 田嶋宏子研究室内

FAX: 03-3326-4550

E-mail: tina2@gol.com

学会ホームページ: <http://www.jafae.org>

年会費振込先: 郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

Prof. Hiroko Tina Tajima

Department of English, Shirayuri College

1-25 Midorigaoka, Chofu-shi,

Tokyo 182-8525 JAPAN

FAX: 03-3326-4550

E-mail: tina2@gol.com

JAF AE's homepage: <http://www.jafae.org>

JAF AE's postal transfer account number:

00280-8-3239